

平城宮跡第97次発掘調査現地説明会資料

奈良国立文化財研究所

昭和51年6月19日 平城宮跡発掘調査部

調査地は推定第一次朝堂院の東北部にあたり、調査地内には東第一堂跡と考えられている東西7m、南北9mの基壇状の土盛りがある。この北の一帯は第一次内裏と推定される地域で、昭和40年の第27次調査以来、7次にわたる調査が行われ、その一部の状況が明らかになっている。今回調査地の北に接する第41次調査では、内裏地域を画する築地回廊の東南隅とここから東へ5間(15m)のびて南折する掘立柱塀、およびその後身である築地によって第一次朝堂院地域が区画されていることを確認している。本調査は昭和51年4月に開始され、発掘面積は2500㎡である。

遺構の概要

宮造営以前のこの地域は、北の推定第一次内裏地域から延びる小支丘末端の東南部で、南および東へ下るなだらかな斜面である。発掘区東部には、この支丘の東に沿って南下する小さな川がある。旧地表面は、谷筋に沖積した軟弱な黒色粘土によっておおわれている。この黒色粘土上に2条の東西溝がつくられている。その後まもなく、この溝と東の川を埋めて、この地域を平坦に造成する全面的な整地が行われる。整地層は下層の灰白色粘土とその上に積まれた暗灰色粘土に分けられるが、この2層は同時に行われた整地の過程を示すもので、時期的な差は認められない。整地層の厚さは、発掘区西部では薄く、ほとんど存在しないが、東へ行くに従い厚くなり、川の部分では1mを越えている。検出した遺構は、前述の東西溝を除いて、すべてこの整地後に造営されたものである。検出した遺構の概要を述べよう。

東西溝 宮の南北2等分線をまたぐようにして掘られた2条の紫掘りの東西溝である。両溝は心線で約10.5m離れる。溝幅は北溝約0.7m、南溝約0.5m、深さはそれぞれ0.4m、0.2mと北溝の方が保存状態がよい。

基壇跡 発掘区南部にある小土壇を中心にして、基壇積土を検出した。基壇積土は東西約18mあり、南北は約20m検出したが、さらに発掘区の南へ延びており、南限は不明である。小土壇上半部は後世の置土であったが、下半部は基壇土の一部であった。その遺存している高さは、基壇周囲の遺構面より約0.5mである。基壇上部は削平されており、柱位置は確認できなかった。基壇の東西辺には、幅0.5～1.0m、深さ5～10cmの浅い溝が走る。北辺は削平され失われていたが、溝に流水の痕跡はなく、地覆石の据付け溝と考えることができる。

基壇は整地層上面から掘り込み地業を行い、築成している。掘り込みの範囲は周囲を巡る浅い溝と正しく重なっており、その深さは基壇西・北辺では浅く20～30cm程であるが、東辺から基壇中央部では50～70cmとやや深い。積土は、掘り込み肩までは大きく2層の粘質土に分かれ、ここから上部はバラス混りの砂質土を版築状に搦き固め築成している。

基壇西北隅に落し込まれた礎石がある。基壇上に据えられた礎石のうちの一つであろう。花崗岩製で、割られて半分は失われているが、径82cm、高さ5cmの円形柱座が造り出されている。円座径からして、径75cmほどの柱がたっていたものと推定される。また、礎石は底の方が尖った形をしており、円座面からの高さは1.20mである。礎石据え付けに際して根石が用いられたので

あろうが、その痕跡も削平され失われている。このことから2m近い基壇高が考えられる。

基壇の東側、東面の掘立柱塀との間に、瓦敷き面を検出した。瓦敷きは基壇東辺に沿って南北にひろがっているが、基壇北辺より北では次第に疎らになり消失する。この瓦敷きは基壇周囲の舗装と考えられるが、瓦を一つずつ敷き並べたものではなく、簡略に瓦を敷均している。また、今回発掘した範囲内では基壇に取り付く階段の痕跡は検出されなかった。

掘立柱塀 発掘区東辺で第一次朝堂院地域の東を画する、南北の掘立柱塀を検出した。柱間約3mで19間分あり、第41次調査と合わせて26間分(77m)確認したことになる。この掘立柱塀は第一次朝堂院の想定中軸線より東へ約107.5m(362尺)離れる。これを中軸で折り返し、第一次朝堂院の東西幅を求めると、約215m(724尺)を得る。柱掘方の多くは東西約2m、南北約1.5mの東西に偏平な方形で、南から6番目の柱穴には瓦がほうり込まれていた。また、今回検出した部分では、門の存在を示す明確な遺構は見つかっていない。柱穴は整地層の上に積まれた基壇状の赤褐バラス土の上から掘り込まれている。南発掘区ではこの赤褐バラス土の西に沿って、幅40～50cmの2条の浅い南北溝を検出した。2条の溝は埋土の状態、幅深さなど近似しており、両者とも溝底に流水の痕跡があり、両者は短い期間のうちに造り替えられた雨落溝であると考えられるが、断割り調査を残しており、その前後関係はいまのところ不明である。

第41次調査では、この塀と重って、その後身である築地を検出しているが、今日の発掘区内には築地に伴う基壇積土は検出されなかった。すでに削平されているものと理解される。

東西棟建物 基壇北縁から25m離れて、その西妻を基壇中軸線にそろえた5間×4間、南北廂の東西棟建物である。平面は一辺10.15mの正方形であり、それを桁行は5間に、梁行は4間に柱割する。柱間は桁行2m、梁行は身舎2.4m、廂2.7mほどである。柱掘方は一辺50～80cmのややずれた方形で、大部分が底に礎板を遺している。これらの礎板は建物東半部では柱穴の西に、西半部では東に寄って据えられている。礎板の大きさは長さ25～30cm、幅15～20cm、厚さ3cm程の小さいものである。この建物は下層にある2条の東西溝の中心と棟通りをそろえ、南の基壇中軸線と西妻をそろえるなど、計画的な位置を占めている。しかし、礎板の小さいこと、柱間が小さく、仮設的な建物であった可能性が高い。造営された時期は、身舎より廂部分の方が大きく、また柱掘方より出土した完形の土師器皿によって奈良末であることが判る。

遺物

出土した瓦類には丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・道具瓦・博がある。

軒瓦は、軒丸瓦53点・軒平瓦22点、総数75点で極めて少量である。

軒丸瓦では藤原宮の瓦を再使用したもの(6273型式・6281型式)を含め、6282—A型式・6284型式など、平城宮跡出土軒瓦の編年で第Ⅰ期(和銅元年～養老5年)におかれるものが、型式判明分の55%を占めている。その他は推定第二次朝堂院に多くみられた6225型式をはじめとする第Ⅱ期(養老5年～天平17年)のもので、第Ⅲ期(天平17年～天平勝宝年間)以降のものは出土していない。

軒平瓦は軒丸瓦にくらべて半数以下の出土量で、藤原宮式(6641型式)を含め、6664—C型式などⅠ期のものと、6664—D型式、6225型式と組合う6663型式の第Ⅱ期のものとがほぼ同

量で、他に第Ⅲ期のものが(6689型式)1点だけみられた。

基壇跡東側の瓦敷、築地西側の南北溝(西側)などの遺構に伴うものでは、いずれも第Ⅰ、第Ⅱ期のものを含むが、第Ⅰ期のものが多く出土している。

今回調査区の軒瓦は、出土量が極くわずかであること、第Ⅰ期に入る古い瓦が多いこと、第Ⅲ期以降のものが極めてすくないことなどが特色としてあげられる。今回調査区の北側に続く第27次、第41次では型式判明の軒瓦が軒丸瓦約1000点、軒平瓦約1035点出土している。これらを時期別にみると、軒丸瓦で第Ⅰ期が約21%、第Ⅱ期が約61%、第Ⅲ期が約15%、軒平瓦では第Ⅰ期が約36%、第Ⅱ期が約25%、第Ⅲ期が約28%となり、今回出土軒瓦とは異なった傾向を示す。

土器の出土量はきわめて少い。時代が決められるものとして、わずかに東西棟建物の掘立柱の掘りかたから出土した土師器の皿があるにすぎない。これは奈良時代末に属する。

朝堂院・豊楽院の利用事例

1. 平城宮朝堂の利用事例

- (1)即位 (2)大嘗祭の饗 (3)元日の朝賀・饗 (4)正月の節宴 白馬(7日) 踏歌(16日) 大射(17日) (5)外国使節(新羅使・渤海使・唐使)の饗宴 (6)単人奏楽 (7)告朔
(8)その他 (イ)読経 (ロ)叙位 (ハ)宣詔 (ニ)上表 (ホ)特別な宴(基王誕生)

2. 平安宮朝堂院の利用事例

- (1)即位 (2)大嘗祭 (3)元日朝賀 (4)最勝会 (5)伊勢大神宮例幣(9月11日) (6)伊勢斎内親王発遣 (7)出雲国造神賀辞奏上 (8)外国使節(唐使・渤海使)拜朝・宴 (9)朝堂政
(11)告朔 (12)考問 (13)読経

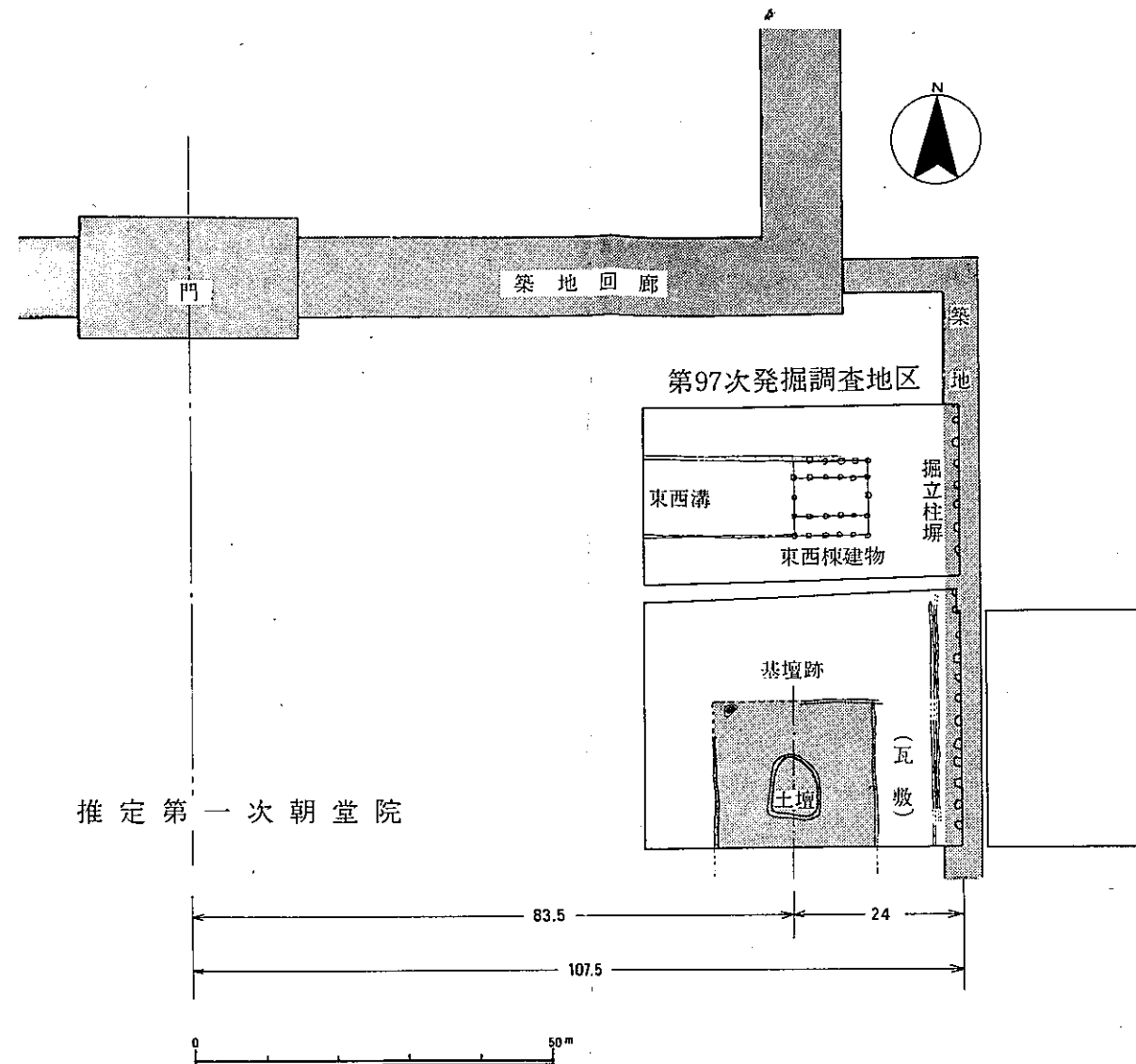
3. 平安宮豊楽院の利用事例

- (1)正月の節宴 白馬(7日) 踏歌(16日) 射礼(17日) 堵射(18日) (2)大嘗祭の饗宴
(3)新嘗祭の饗宴 (8)渤海使の饗宴 (9)その他 (イ)相換節会 (ロ)叙位 (ハ)読経

平城宮・平安宮の朝堂院・豊楽院の利用事例対照表

	平 城 宮	平 安 宮 (9世紀)
即位	大極殿	大極殿
大嘗祭	太政官院(淳仁・光仁・桓武)	朝堂院
大嘗祭饗宴	朝堂の例あり	豊楽院
元日朝賀	大極殿の例多し	大極殿
元日饗宴	朝堂の例あり、但し、天平5,6,7,10年は中宮・朝堂併用。勝宝6年以降 内裏の例多し。	紫宸殿
正月節宴		
白馬(7日)	朝堂の例あり	豊楽院(弘仁4~承和3年)→豊楽院・紫宸殿併用(承和6~貞観3年)→紫宸殿(貞観4~仁和2年)
踏歌(16日)	朝堂の例あり	豊楽院(弘仁6~13)→紫宸殿(天長4~仁和3年)
射礼(17日)	朝堂の例あり	朝堂院(延暦16,18,22年)→豊楽院(弘仁6~貞観6年)→建礼門前(貞観7~仁和3年)

(主に「続日本紀」以下の五国史による)



第97次発掘調査地区概要図(1/1000)

参考資料

藤原宮東第一堂(発掘遺構)

9間×4間 四面廂 南北棟(身舎14尺、廂10尺)
桁行総長35m、梁行総長14.2m

平城宮第2次朝堂院東朝集殿(発掘遺構)

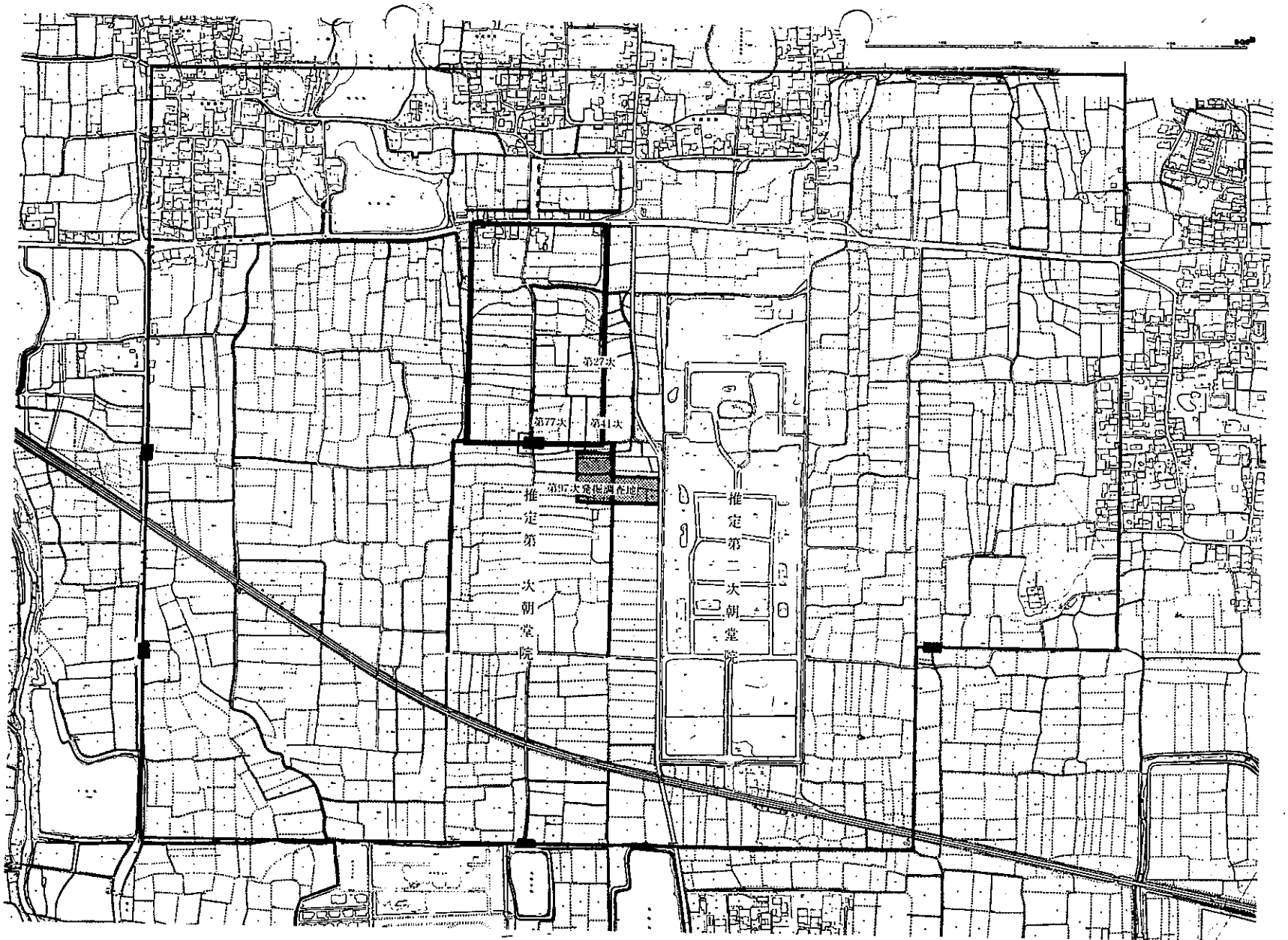
基壇規模 東西18m、南北38.5m
凝灰石による壇上積基壇

平安宮朝堂院東第一堂=昌福堂(大内裏図考証付図)

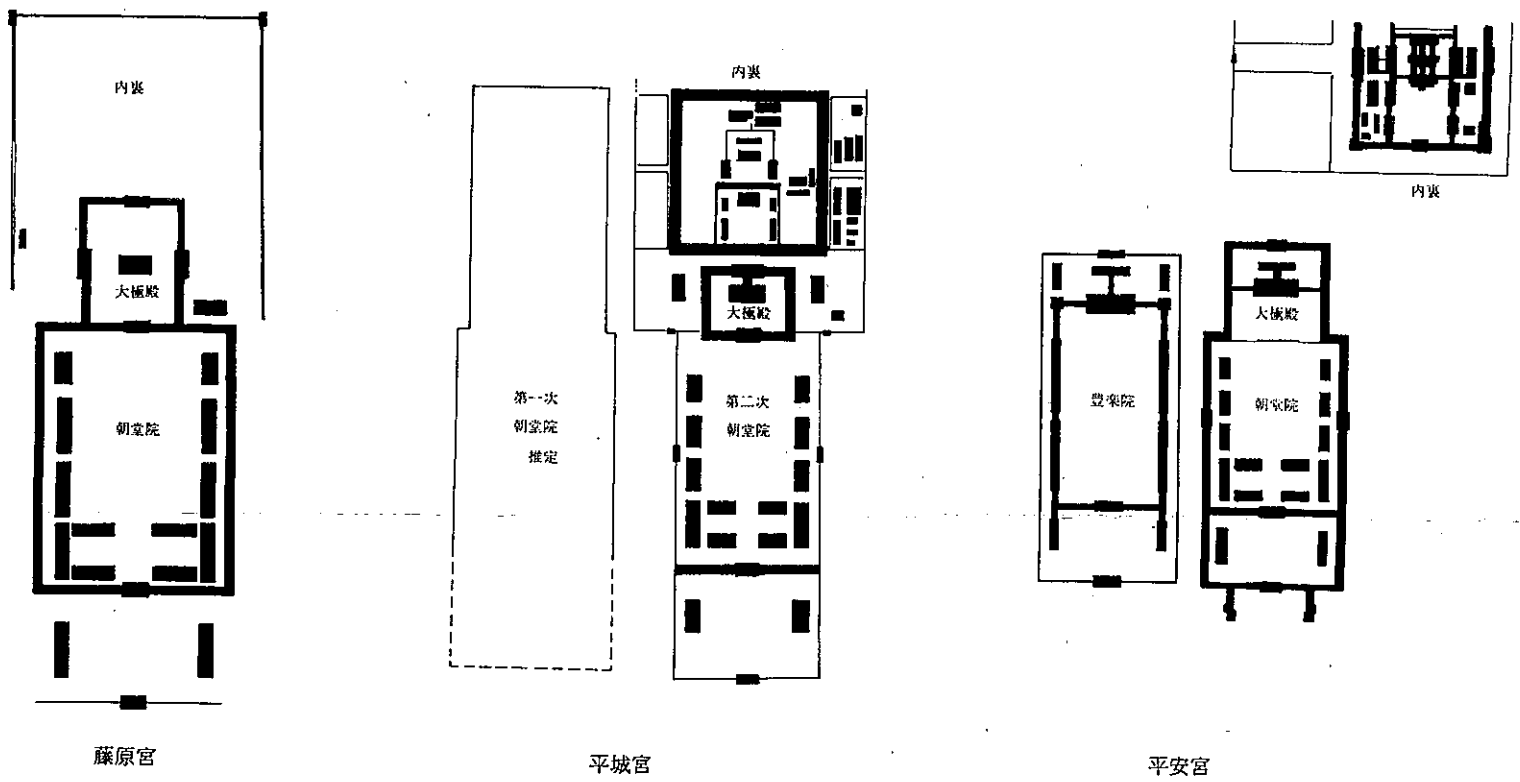
7間×4間(1間=1丈)東西廂 南北棟
桁行総長約12.5m、梁行総長約7.1m

平安宮豊楽院頭陽堂(大内裏図考証付図)

9間×2間 南北棟(桁行1丈4尺、梁行1丈8尺)
桁行総長約79m、梁行総長約10.7m



平城宮跡 (1/7500)



藤原宮 平城宮 平安宮朝堂院・豊楽院・内裏比較図 (1/9000)